

宇宙戦艦ヤマト2202外伝 波動実験艦武蔵 後日譚

朱鳥洵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガトランティス侵攻の最中、人知れず任務を果たしたヤマト級2番艦、波動実験艦武蔵。

地球へと帰還した武蔵のクルーが目当たりしたのは、地球を飲み込まんとする白色彗星の威容と、敢然とそれに立ち向かおうとする宇宙戦艦ヤマト、そして地球、ガミラス連合軍の姿であった。

今、知られざるもう一つの最終決戦が始まる。

※この物語は、「宇宙戦艦ヤマト2202愛の戦士たち」本編の第24話「ヤマト、彗星帝国を攻略せよ!」第25話「さらば宇宙戦艦ヤマト」第26話「地球よ、ヤマトは…」を元に若干の改変を加え、「武蔵が銀河中心へ向かわなかった」ことから分岐するIFストーリーとして展開されます。

※以前の連載作「宇宙戦艦ヤマト2202外伝 波動実験艦武蔵」の後日譚となります。

目次

前章 「母なる大地」	1
後章 「英雄の帰還。望む未来」	10

前章 「母なる大地」

縁の力——大いなる和。

地球宙域に浮上したヤマトは、眼前に迫る白色彗星を睨み、エネルギーを溜め始める。

ヤマトを包み込んだノイ・デウスーラが現出してくると、青き誇りをも巻き込んで力と化す。

『——我がノイ・デウスーラが、ヤマトを守ってくれよう』

崩壊する艦は力となり、ヤマトを包むようなエネルギー体が稲妻を纏う。

白色彗星の赤い帯が現れ、彗星の中から数多の艦が現れてくる。

「トランジット波動砲……発射！」

ヤマトから解き放たれた赤き矢は、白き盾を打ち破り、その余波は多くの艦を、都市帝国が飲み込んだ惑星を粉碎していく。

地球にまで届くそれは、宇宙に轟く希望の光。

「——ヤマトの、光……」

地下都市のモニターでその光を目撃した有賀の呟きは、宇宙に霧散する彗星のガスへと消えていった。

波動砲口がオーバーヒートしたヤマト。

地球を背に立ちはだかるその艦の背後に無数の光が瞬くと、宇宙が割れる。

氷を砕き、艦体を回して現れるいくつもの艦。

オレンジに光らせた目、飛行甲板から飛び立つ艦載機、赤い船体の艦をもつガミラス艦隊と肩を並べるのは、船体の所々を黒いパーツへと換装されたアンドロメダ級——アキレス、アンタレス、アルデバラン。

三艦が率いるドレッドノート級と、それを直掩する護衛艦、パトリール艦の群れはヤマトを守るように展開する。

「艦隊より入電。『地球、ガミラス連合艦隊は、これよりヤマトを援護する』」

相原の声の直後、ヤマト艦橋のパネルにある人物の姿が映った。

『よう、古代』

「バーガー……!」

地球式敬礼を向けるガミラス軍人、フォームト・バーガー。

『また、肩を並べる日が来るなんて思わなかったぜ』

「ああ……だが、これ以上に心強い援軍はないさ」

『そいつは良かった。俺たちの任務は、ヤマトを敵のど真ん中に送り届けること。そして地球を守り抜くことだ』

「……」

『まあそう気負うなよ古代。何もヤマトだけでやってこいって言う訳じゃねえ。俺たちは地球防衛を任せられたが、地球艦隊は違う。前線で、ヤマトの道を切り開くはずだ』

「ヤマトの、道を……」

『地球も、ガミラスも一度はヤマトに救われた。そのヤマトに、ヤマトだけにまたいい格好はさせらんねえよ』

「すまない、バーガー」

『これで貸し借りは無しだ。行つてこい、古代。地球は、地球にいるヤツらと俺たちに任せとけ』

通信が切れると、微細レーダーが次元の狭間から浮上する反応を捉えた。

ヤマトの四方に浮上した次元潜航艦が牽引ビームを接続し、ヤマトを異次元の狭間へと引き込む。

その前方ではアキレスとアルデバランがそれぞれカラーリングの異なるドレットノート級と接続して宇宙に消えた。

「義弥さん」

有賀の側に立つ柑奈が袖を引っ張る。

「……行きましょう、武蔵へ」

彼女の言葉に頷いた有賀は、人混みの中を駆け出した。

「がんばれ……お兄……」

兄の背中を見届けた美佳は、再びモニターに映る艦隊へと目を向ける。

漆黒の艦への砲撃も虚しく、次々と突破されていく地球艦隊、ド

レッドノート級。

無人艦の制御を一手に引き受けるアンタレスは後方で断続的な砲撃を繰り返すばかり。

ドレッドノートの壁の中から抜け出た真紅の艦は回避行動による降下を利用して甲板に乗せた攻撃機を発艦させた。

「いいか、古代が……ヤマトが帰る場所を守るのが俺たち使命だ。一歩も退くな、押し込め！」

バーガーの号令と共に速度を上げたデストリア級とケルカピア級は、ドメル艦隊が小マゼランで見せた高機動戦闘を開始した。

その隙間を縫ってガミラス艦の討ち漏らしを的確に沈めていくのは、アンタレスから発艦したコスモファルコン隊とノイ・バルグレイから発艦した艦載機たち。

飛来した火焰直撃砲はそれを事前に察知した艦隊によって回避され、宇宙に霧散した。

地球

電気の消えた宇宙港を進み、2人はタラップを駆け上がる。

「艦長！」

艦橋に入ると、先程艦を降りたはずの顔が見えた。

「遅かったな、戦術長」

「お待たせしました、艦長」

頷いた2人が席につく。

ゆっくりと上を向く砲身から放たれる三条の陽電子が艦体を閉じ込める屋根を跡形もなく吹き飛ばし、青き星を蹂躪する艦を海へと墮とす。

まどわりつく固定具を吹き飛ばし、抑え付けられた宇宙へと上昇するそれは、艦首にペイントされた「武蔵」の文字を輝かせる。

灼かれる街へと突き進む武蔵は、母なる星の空を征く。

再び平和を、自由な空を取り戻すために。

彗星帝国内部

ヤマト到達座標にワープアウトしたアキレスとアルデバランは、ブースターとして使用したドレットドノート級を切り離して制御下に置き、迫りくる漆黒の艦隊を押しとどめる。

無人艦のパーツを利用して急ごしらえの修理を終えたとはいえ、万全の体制ではない。

隙の増える拡散波動砲の使用はできず、パーツを共有しているというだけで付け替えられた区画は同じ艦とは思えないほどに言うことを聞かない。

それでも無人艦へ制御信号を送り、迫る艦隊の攻撃に耐えながら撃ち続けるのは平和への象徴として造られた旗印故か、それとも。

——希望の力か。

水しぶきをあげ、異次元から浮き上がったヤマトを中心に輪形陣を組む。

「全システムを自動航法装置とリンクさせろ」

古代の号令の後、ヤマトの微細レーダーが光を帯びる。

防御陣形を取るアキレス、アルデバラン艦隊の更に外側、全周に造成し切れていないカラクルム級を従えたヤマトは一層速度を上げ始めた。

地球

「後部デツキに被弾あり、ダメージコントロール作動中！」

「上方よりミサイル接近！」

船体から煙を引きながらもエンジンを強く噴かす武蔵の後方では、どこからともなく飛来したミサイルによって爆発が起こる。

「なんだ!?？」

「地上から……航空機……?？」

丹生の言葉の直後、白煙を引いて19機の機体が飛び去った。

「所属確認……アルタイル航空隊。本艦から下された機体のようです」

折り返して武蔵と歩幅を合わせたファルコンは、武蔵を中心にデルタ陣形を組む。

先頭に立つ隊長機がバンクを振ると、ファルコン隊は上方に逃れた。

「心強いな。転舵反転！ ヤツらを地球から放り出す！」

ビーム砲撃で安定翼を貫通されながらも敵を見据える武蔵は、艦首にエネルギーを蓄え始めるアポカリクス級めがけて急上昇をかけた。空を貫いた蒼い光の中に轟く爆音、輝く爆発。

消え去った安定翼を切り離し、溶けた両舷を晒すようにバレルロールを仕掛けながら、長大な飛行甲板を陽電子で溶かし、抉りとる。

燃え落ちる漆黒の空母を過ぎ去った武蔵は、その背後に展開するカラクルム級へと砲撃を始める。

「ダメです、カラクルム船体の装甲が抜けていません！」

「目的は撃破じゃない、地球から撤退させる事だ。装甲が抜けなくても撃ち続ければ抑止力にはなる。敵艦の標的を武蔵に集めるんだ！」

「義弥さん、でもそれじゃあ武蔵が持ちません……どうやってこの戦力差は……」

「それでもやるしかないんだ、柑奈。折角建て直した街だ……もう失わせちゃいけない。帰る場所も、大切な家族も」

砲火の雨の中を突き進む武蔵の火は、誰かの目に触れることはない。

たたとえばとしても、彼らは――。

都市帝国内部

ヤマトへ迫る攻撃を一手に受けていたアキレスとアルデバランは既に満身創痍、速度も落ち始めてその進路をヤマトに譲りはじめていた。

「アキレス、アルデバラン、無人艦とともに落伍していきます」

西条の声に頷いた古代は、振り返って相原を見る。

「相原、アキレスとアルデバランに打電しろ。貴艦らはトランスワープを用いて現宙域を離脱せよ」

「了解」

表層の彗星を排除したとは言え、重力源は健在であった。

BBB戦隊では突発的状況に対応し切れないと判断してのアキレス、アルデバランの派遣であったが、重力源の最中へ行き、離脱するにはトランスワープを用いるほかはない。

黒煙と共に振り向いた両艦は、ヤマトに希望を託してドレットノー卜級と共にワープした。

『ヤマトの健闘と、無事の帰還を心より願う。地球で待つ』以上です」
「彼らの切り拓いた道が無駄にするな。両舷全速！」

土方艦長の号令で更に速度を上げたヤマトは、艦首から青い波動防壁を纏わせて迎え撃つ敵艦隊へと向かっていく。

迫り来るイーター1、デスバテーターの群れを主砲とパルスレーザーで葬り、ニードルスレイブを爆雷で沈める。

波動防壁は次第に貫かれ、船体が爆炎に包まれた。

数多の思い出、無二の間を犠牲にしても突き進まなければならぬ。
い。

守られるべき未来のために。愛する人が生きる明日のために。

「これがせめてもの償いだ」

漆黒の翼、ブラックバードを駆る加藤は、ヤマトへ迫る旗艦を睥む。

「翼、見ててくれ。父ちゃん、お前のために戦って……必ず、勝ってやる。ごめん、真琴……でも、俺はもう」

ありつたけのミサイルを叩き込み、残された機銃を叩きつける。

「もう、真琴には会えない。俺は、一度ヤマトを裏切った男だ」

力強く突き進むヤマトの背を敬礼で見送る彼はなおもヤマトを狙う赤き剣へと向かう。

「古代、未来を頼んだ……！」

地球

「敵艦隊、本艦に砲撃を集めています！」

「損傷は気にするな、地球を離れる！」

第三砲塔は跡形もなく、エンジンの推力も残された火砲の威力も満
足なものではない。

しかし、武蔵はまだ生きていた。

地球を占拠した艦隊のおよそ2割を沈め、武蔵は敵艦を引きつけたまま青き星を後にせんとする。

「機関推力低下、このままじゃ重力圏すら抜けられないぞ……」

泰平の呟きと共に、艦体が大きく揺れる。

光が遮られた艦橋からは武蔵を抜き去るアポカリクス級の飛行甲板が見えていた。

「……なんだ……一体、何が……」

武蔵を襲っていた砲撃は止み、ガトランティス艦隊は地球を離れていく。

「ヤマトの作戦が成功したって事なのか……?」

「多分な。そうでもなきや突然撤退したりしないさ」

地球圏に留まる武蔵は、観測装置を用いて状況をモニターに映し出した。

そこには、目覚めた滅びの方舟と離脱してくるヤマト、そして地球を脱した後コントロールを失って自滅するガトランティス艦隊の姿があった。

「……なんだよアレ……」

有賀が息を呑む。

何が起こっているのか、ヤマトの作戦内容を知らされていないなかった武蔵のクルーには分かるまい。

滅びの方舟が放つ一撃が月を抉る。

「……?」

地球防衛を担っていた地球、ガミラス連合軍は既に満身創痍。

武蔵には宇宙に出る力すら残されておらず、単艦で突撃を敢行したヤマトにすら、アレを倒す力はない。

もしも第二射が地球に当たれば——いや、掠めただけでも地上は滅びかねない。

「……あれ? 都市帝国、移動を開始しました……予測進路は、土星です」

「土星?」

丹生に聞き返した近藤に、次いで柑奈が報告を入れた。

「恐らく、第二射の用意でしょう。土星の核を取り込んで今度こそ地球を……」

「ヤマトの周りに、駆逐艦ふゆづき、戦艦わだつみ他数隻が集まっています」

「通信が来てる……」ヤマトは機関が臨界に達し、艦の存続も困難。乗員を退艦させ、地球へと帰投する』との事です」

パネルに映される映像には、ヤマトから脱出するシーガルと、離れていく艦艇の姿が見えていた。

「ヤマトは、あそこで放棄するのか？」

「さあな……」

泰平に答えた有賀は、ただモニターに映るヤマトを見つめていた。

「……動いた……」

来島が立ち上がり指をさす先では、回頭したヤマトが遠ざかる都市帝国へと向かい始める。

「なんだよ、全員退艦したんじゃないのか……?」

「わだつみより報告、古代戦術長と森船務長の所在確認できず。ヤマトに残っている可能性大！」

次第に輝きを帯びるヤマト。

古代の意思を、人々の希望を一身に背負って立つその姿には、不思議と哀愁すら感じる。

「ヤマト……」

席を立つ有賀の目に映ったのは、黄金の希望に敬礼を送る艦長の姿だった。

深呼吸をして呼吸を整えた有賀もまた、ヤマトを敬礼をもって見送る。

彼らに続いてヤマトを見送る武蔵のクルー達が抱く気持ちは、きっと同じであろう。

宇宙に、ひとときの眩い光に消える希望の艦。

涙ぐむ人、絶望感に打ちひしがれる人。

様々な想いとともなヤマトは旅立ったのである。

ヤマトが取り戻した空、夕暮れの空に佇む武蔵は、地球に帰還する

友軍を迎えながら戻らない艦を待ち続けた。

滅びの未来は変わった。

だがこの未来は、人々が望んだものだったのだろうか――。

――前章 「母なる大地」――

後章 「英雄の帰還。望む未来」

青い空、青い海。

それとは不釣り合いなほどに飛び立っていく主力戦艦たち。

——ヤマトの消滅から半年が経った今でも、戦時と見紛う光景が広がっていた。

「いつてきまーす！」

元気よく玄関から出て行く妹を見送り、有賀は踵を返した。

「あつ、柑奈さんじゃないですか」

「美佳ちゃん、こんにちは」

「はいっ」

家から出てしばらく駆けていた美佳は、よく晴れたこの日に映える白いブラウスの女性に頭を下げた。

「これからお出かけ？」

「いえ。これから実習なので」

「そっか、頑張ってるね」

手を振りながら再び駆け出す少女に答えながら、彼女は清々しい空の中を歩き出した。

美佳が艦乗員を育成する学校に通っているとは聞いていた。その理由を聞いても一切答えてはくれないのだが、きっと彼女なりに理由があつてのことだろう。

潮風に乗って青き艦——アルデバランが港へと帰還した。

「義弥さん」

美佳から合鍵を渡されていた柑奈は、上がりこむとりビングで声をかけた。

「ああ、来たのか」

「なんですかその反応……ん？」

目に入ったテレビ画面には、あの日のヤマトの姿が映っていた。

『ヤマトが消息不明になってから今日で半年。幾度にも渡る捜索でも、その消息は全く分かっておりません。地球政府は数日内にも、アキレスを旗艦とした捜索隊を——』

どこか遠く感じるアナウンサーの声に耳を傾ける。

「ヤマトは、もういないってのにな」

立ち上がった有賀は冷蔵庫を開けると、ペットボトルを出しながら口を開く。

「どつちにする?」

「えっ、あー……じゃあ、お茶で」

「おっけ。座っててくれ」

「はい、分かりました」

彼女の前にお茶の入ったコップを置くと、有賀は無造作にチャンネルを変えた。

「どこ入れてもヤマトの話題ですな……」

「……いい加減未来見ろってんだよ」

目に見えてわかるほど苛つく彼の気持ちは、柑奈には少し分かるような気がした。

地球での戦闘で大破した武蔵は未だ修理中、月の修繕は銀河ほか数隻が駆り出され、地上も見違えるほどに復興している。

時間断層から飛び立ち続けるドレッドノート級だけが気がかりであったが、その大半はヤマトの手がかり探しに従事しているとの噂だ。

艦隊を率いるために修理を急がれたアキレス、アンタレス、アルデバランはそれぞれ無人艦を従えて任務に臨んでいる。

未来へ歩き出そうとする地球とは裏腹に、報道はヤマトの消息に重きをおく。それは国民が最も興味を引く話題であり、皆が英雄の帰還を心のどこかで諦められていないからである。

そんな状況に対して、有賀は言いようのない不満を抱えていた。

「今日、英雄の丘に集まるヤマトのクルーを見かけました」

「……ヤマトのクルーの気持ちは分かる。あの戦いで、彼らが失ったものはデカすぎる」

一気にお茶を飲み干したコップを置きながら「でも」と有賀は続けた。

「世間は別だ。ただ助けられただけ、あの時ヤマトを求めていたとし

ても、失ったと心の底からは思っていない。所詮他人事なんだよ、それなのに毎回毎回好き勝手なこと言いやがって……」

ヤマトに関する報道番組において、アナウンサーは毎回知識人を名乗る人たちに「あれしかなかったのか」と問い、それに対して「他の道も……」などというのがもはや定番となっていた。

現場を知らない、ただ見ていたが故に言える無責任なコメント、それに流されヤマトの行動を批判する人たち。

あの時あの背中を見ていた人々の心に刻まれた英雄ヤマトは、この半年で廃れ始めていた。

ヤマトのクルーにとっても、古代にとっても地球を守るために下した最も過酷な道。

あの時地球を守るには、あの行為しかなかったと言う知識人は少ない。

「少し外に出ませんか？　ずっと家の中にいたら気が滅入りますよ」

「……そうだな。準備してくるから、どこ行きたいか考えておいてくれ」

「は、はい」

立ち上がって部屋の奥に消える有賀を目で追い、再びニュース番組へと目を向ける。

『ヤマトが消息不明になってから今日で半年となりました。果たして、ヤマトは今どこにいるのでしょうか。本日午後7時から特別番組として——』

しばらくして、海岸線を歩く2人の姿があった。

「長閑な海ですね」

「この下に時間断層があるなんて、信じられないな」

「そうですね……3年と半年……ですか。これからも作られるんでしょうね」

「その割には同じ艦ばかりだけだな。進歩がないっていうか……」

「中身は違ってみたいですけど、傍目には分かりませんね」

そんな会話をしながらしばらく歩き、2人は海沿いの公園のベンチ

へと腰をかけた。

カモメの鳴き声に耳を傾けていると、微かな音が潮風と共に聞こえてきた。

「……なんだ、これ」

「義弥さん？」

「音が……エンジンの音……？」

「エンジン……あつ、何か光った……」

彼女が指をさす方には、微かな金色に輝く水面。

それはすぐに輝きを止め、音も止んだ。

「なんだったんだ、あれ」

「……もしかしたら……」

刹那、彼らが持つ端末が震えた。

艦が修理中であろうと、待機中の軍人にはこの携帯端末の所持が義務付けられている。

2人同時に画面を確認すると、そこには。

「ヤマト——!?」

『1週間ほど前、時間断層にヤマトと思われる艦艇が浮上していたことが、今日宇宙軍から発表されました。ヤマトの内部には生存者が1名いた模様で、軍は意識が回復し次第事情を聞く方針です。ヤマトの帰還には——』

秘匿されていたヤマトの情報が解禁されると、ニュースはこぞつてヤマトについての報道を始めた。

ヤマトの機関室にいた山本玲は既に退院していたのだが、未だ意識が回復しないと明かしたのは彼女とヤマトクルーへの過剰な反応を抑えるためであった。

「ヤマトを使って、古代さんたちを迎えに行く？」

「ああ。上でも実行するかについては割れてるが、それが真田技師長、山南さん、あと銀河の藤堂艦長が出した案だそう。実行すれば、時間断層は潰れて消える」

「それは割れるわけですね……芹沢さんは時間断層に賭けてましたか

ら」

お茶を置きながら柑奈は目を伏せた。

『潰してしまえばいいんだよ、あんなもの』

テレビ通話の向こうで丹生が憤慨する。

『でも、そう簡単にはできませんよ。アレは地球の復興の要でしたし』

「ああ。近藤艦長が言うには、反発してるのは芹沢さんだ」

「それに時間断層を財産だと思ってるのは地球だけじゃなくて、ガミラスも。バレル大使の立ち位置はわからないけど……」

来島に答えた有賀と柑奈の声を最後に、声がなくなる。

軍人として、地球に住むものとして。何より一度ヤマトに救われたものとして、考えることは皆同じ。

それだけに、簡単に結論を出せるものではなかった。

「お兄！」

夕日の差し込むリビングの扉をあけて入ってきた美佳の音が響く。

画面の向こうにいる丹生や来島がそれに驚いてビクツと身体を跳ねるが、美佳がそんなことを知るはずもない。

「美佳、学校はどうしたんだ？」

「もうそれどころじゃないよ！ 学校もちよつと早く終わったし」

そう言っておもむろにテレビをつけると、そこには会見の会場が見えていた。

『ただ今から宇宙軍の藤堂長官より緊急中継をお送りします』

淡々と告げたアナウンサーの声の直後、画面に藤堂長官が映った。

国民の皆様、この度はわたくしから、皆様に大切なお話があるので
す。

皆様もご存知の通り、1週間前、ヤマトが突然の帰還を果たしまし
た。

生存者救出を兼ねて行われたヤマトの調査と復旧作業において、依然
行方が分からない古代進戦術長と森雪船務長について新たな事実
が判明したのです。

半年間行方不明となったため、軍規に則り戦死、殉職とされてきた

両名は、生存している可能性が高いという事なのです。

地球を救った英雄をヤマトを用いて迎えに行くというのは我々も成し遂げたいところでもあります。

しかしそれには、一つ、我々にはとても大きな犠牲を伴うのです。それが、時間断層。

時間断層の奥には、高次元へと続く更なる結節点がある事が、調査によって判明いたしました。

今回ヤマトは、そこを通りまるで川に流されてきたようにこの世界へと帰還いたしました。

彼らを救うには、ヤマトを再びその川に乗せ、今度は遡上させる必要があるわけです。

我々にはそれを可能とする装備を持った艦がありますが、その莫大なエネルギー故にヤマトを送り出すと同時に……時間断層は消えてなくなります。

我々はこの決断を、この地球の未来に関わる決断をするにあたり、皆さんの意見をお伺いしたく国民投票を行うことを決定いたしました。

明日の夕刻、地球連邦代表、芹沢虎徹と、ヤマト副長、真田四郎による演説を行い、明後日に投票の運びとなりました。

地球のこれからを左右する決断を皆さんに委ねるのは心苦しい。しかしどうか、我々にあなた方の言葉を聞かせてはいただけませんか。

長官の会見が終わり、人々の中には様々な意見が飛び交った。もちろん、現政権への批判も。

それでも真田の演説に心を打たれた人々は動き、投票率は9割を超えた。

投票票から数日が経って時間断層から飛び立つ艦艇も無くなり、代わりに銀河だけが内部へと潜り込んだ。

武蔵のクルーは立ち入り禁止区域の護衛に駆り出されている。危険区域の非難は終わり、そこに立ち入る人影もなかった。

「本当に、できるんだろうな」

刹那、けたたましい音とともに地面が堕ちた。

突如として開いた穴へと堕ちていく構造物の波をくぐり抜けて浮上するものがあつた。

「……銀河か」

空へと飛び立つ銀河を見つめていると、通信機から音声が響いた。

『こちら、銀河艦長、藤堂早紀。作戦は成功した。銀河はこれより、村雨改型を連れて地球軌道で待機する』

エンジンを点火した銀河と、地上から飛び立った村雨改型数隻を引き連れて宇宙へと飛び立った。

夕暮れの空に銀河が消えてからしばらく経ち、微かに空に輝きが増していく。

「義弥さん、銀河から、宇宙に高次元反応を確認したとのことですよ」

「あの光か」

彼が指差す先には、滝のように流れる光が空に輝いていた。

『こちら銀河。たった今、ヤマトの帰還を確認した。古代戦術長、森船務長の姿も第一艦橋に』

それを聞くと、彼らの顔に笑みがこぼれた。

「まったく、心配かけさせる英雄だな」

陽が落ちて闇夜に帰還するヤマトを迎え入れた地球は、静かに未来へと動き出した。

—— 苦難と希望の待つ、最も可能性に満ちた世界へ。

—— 後章 「英雄の帰還。望む未来」 ——

—— 完 ——